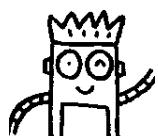


こふん 古墳は、どうやってつくられたの



土を盛り上げて墳丘ふんきゅうをつくり、その上やまわりに石をおいたり、「はにわ」をならべたりしたんだよ。

古墳には、大きいものから小さいものまで、さまざまな大きさがあります。大仙だいせん（大山）古墳こふんのような大きい古墳をつくる時は、各地から何千人もの人々を集めたことでしょう。集まった人々のために、住まいや食料を準備することも、必要だったことでしょう。このような大事業を行えた王は、強大な力をもった大王おおきみ（のちの天皇）クラスの人たちだけです。

かんたん
簡単な農具・工具や、かご・修羅しゅらなどを使った

古墳時代には、今の土木工事の現場で見られるような、ブルドーザー・クレーン・ダンプカーなどがなかった時代です。そのため、古墳づくりには、すき・くわなどの農具や工具、土を運ぶかご、石を運ぶ修羅（「ころ」の上をころがす、そのようなもの）などを使ったようです。

大きい古墳のつくり方

ほり
濠にかこまれた大きい古墳は、次のようにしてつくられたようです。

土地を平らにし、設計図をもとに縄張りなわばをする。

まわりの濠をほり、その土を内側に盛り上げて、墳丘を築く。

土どめ用の石や、りっぱに見せるための川原の石を運んで、墳丘におく。

濠のまわり、墳丘だんの段の上や頂上ちようじょうに、「はにわ」をならべる。

修羅を使って、石棺せきかんを頂上まで運び、石室せきしつにおさめる。

このような大きい古墳は、王が活着ている間につくられました。王が死ぬと、遺い体たいを墳丘の頂上の石棺におさめて、お葬式そうしきを行いました。